

認知心理学的な文化研究の可能性

杉尾 武志 (認知行動科学研究室)

1. はじめに

文化情報学部において卒業研究が始まってから今年で8年目になる。これまで本研究室では、文化的対象を人間がどのように受容しているのかという観点から、様々なテーマで所属する学生は卒業研究に取り組んできた。本稿において、これまでの卒業研究を振り返ることで、どのような認知心理学的な観点から文化を説明したり、理解したりすることがなされてきたかを概観し、これからの文化情報学部における認知心理学的な研究の可能性を述べることにしたい。

2. 文化的対象の個別性をどのように考えるか

認知心理学的な実験において、意味を有している対象を実験参加者に提示する刺激材料として用いることは、条件の統制を難しくするという問題を引き起こすことが多い。しかしながら、文化を研究対象として扱う上で、それぞれの対象の個別性を無視することはできない。

椎名 (2008) は、グレゴリー・コルベール (Gregory Colbert) やピーター・ビアロブルゼスキ (Peter Bialobrzeski) といった著名な写真家による作品を用いて、虚再認の生起に関わる要因について検討を行った。虚再認とは、初めて接する対象であるにも関わらず、これまでに接したことがあると誤って再認してしまう現象のことである。一般的な記憶実験は、提示された刺激材料を記憶する学習段階と、学習段階で提示された刺激材料であるかどうかを判断させるテスト段階の2段階から構成されることが多い。椎名

は、学習段階において提示された写真に対して適切なタイトルを付けさせる条件と、SD (semantic differential) 法を用いて写真の印象を評価させる条件の間でテスト段階での成績 (虚再認率) に影響がみられるかどうかについて検討を行った。

こうした記憶の再認課題において、学習段階で提示されていない刺激材料 (テスト段階で実験参加者が初めて目にする刺激) のことをディストラクタ (妨害刺激) と呼ぶ。こうした妨害刺激が実際に学習した刺激と画像としての類似度が低いと、学習段階で記憶したかどうかという判断は容易になり、結果として虚再認率は極端に低くなってしまふ。その結果、学習の違い (タイトルを付けさせる、または印象を評価させる) が実際に記憶に対して影響を及ぼしていたとしても、行動指標 (反応の正確さなど) としてその違いを検出することが不可能になる。

こうした問題点を克服するために、椎名は著名な写真家によらない写真を素材集から選定して、それらの写真に対して画像処理を行うことで類似した雰囲気を持つように加工させた。さらに、元の刺激材料である写真に対しても画像処理を行い、モチーフは共通しているが雰囲気が異なる写真をディストラクタとして作成した。こうした実験手続きを通して、モチーフが等しいと虚再認率が上昇することを明らかにした。こうした実験結果は、初めて見た写真に対して「何か見たことがある気がする」と感じる時に、その写真のモチーフが重要な手がかりとなっていることを示唆している。個々の写真家による特徴自体には個別性があり、そうした個別性が写真に対する評価をもたらしていることは言うまでもない。こうした個別

性にかかわる特徴を文化的な解釈を基に明確にし、画像加工といった形で操作可能にすることで、実験として成立させることが可能となった研究例である。

個々の文化的対象に対して、どのようにして個別性を定量化するかという課題は、伝統的な文化研究におけるその対象が生み出された文脈に基づいた解釈や、データサイエンス的なアプローチによって検討することが可能である。こういった側面で文理融合的な研究の余地があるとみなすことができる。

3. 内容をコード化するアプローチ

前節で述べたアプローチの場合、あくまでも個々の文化的対象が持つ特徴の有無が記憶などの認知的機能にどのような影響を与えるかということが明らかになるのであって、個別性そのものの影響について扱うことはできない。

宮本(2010)は、日米の有名なアニメーション作品を題材として、制作方法の違いが内容の理解に対してどのような影響を及ぼすかについて実験的検討を行った。映像は静止した複数のフレームから構成されているが、人間は連続した時間の流れとして知覚することができる。しかし、その内容を理解するためには、時間の流れにおいて出来事としてまとまっている箇所を心の中で「切り出し」、時系列的に整理する必要がある。Zacksら(2009)は、こうした心の働きを事象分節化と呼んでいる。宮本は、それぞれのアニメーション作品に対して事象分節化理論にしたがってコード化を行い、知覚される物語の境目との対応関係を検討した。その結果、伝統的な手法に基づいたアニメーションの場合はカットなどが比較的目立ちやすいために映像の中の知覚的变化が物語の境目としてとらえられやすいことが明らかにされた。それに対して、ハリウッド的な手法をふまえた作品の場合は、カットなどに気づきにくく、結果として概念的変化が物語の境目とみなされることが示された。

宮本による卒業研究は、表出された内容を客観的に把握するために用いられる内容分析の手法を利用して、文化的対象の個別性を定量化したものと言える。こうした手法は、従来用いられていたテキストだけでなく映像に関しても有効であることがその後の研究を通して明らかにされている。

4. クロスモーダルな視点

どのような文化的対象であったとしても、それが社会において受け入れられ、次の世代へと引き継がれるためには、何かしらの共通した特性を有していると考えられる。こうした特性のひとつにクロスモーダル性が挙げられる。クロスモーダル性とは、ある感覚モダリティにおける情報が別のモダリティの情報に影響を及ぼす性質を意味している。例えば、食品のパッケージから、その味を思い浮かべることができるのはクロスモーダルの連合がパッケージにおける視覚的情報と味覚的情報の間に形成されているからと説明することができる。こうした潜在的な連合は、人間が日常生活を送る中で環境における規則的な情報を拾い上げていることを示している。さらに、人間が外界に対して予測的ふるまうための基盤となっていると考えられる。2009年からスタートしたカリキュラムにおけるジョイント・リサーチが始まってから、特にこういったクロスモーダルな視点に立った卒業研究が多く進められてきた(例えば、山根、2012)。

5. 次の10年に向けて

このように、認知心理学の立場から文化的対象の普遍性と個別性を両立させた中で卒業研究が進められてきた。最後に、今後の課題を2点挙げることにしたい。

まずは、文化による認知の違いをどのように説明するかという点である。近年、多くの研究がなされてきているが、なぜ文化によって認知の違いが生じるのかについては認知スタイルや自己観の違いといった原因のみを述べるにとどまっており、そのメカニズムについてはほとんど明らかになっていない(例えばMasudaら、2008)。

もう1点は、感性認知の機能的な役割を明らかにすることである。文化が受容されて、他の集団や世代に受け継がれるためには、感性的な点において高く評価されている必要がある。こうした感性的な評価の違いが、注意や記憶といった認知メカニズムを構成する機能に対してどのような役割を果たしているのかについては情動と認知の関係から研究が進められているに過ぎないのが現状である。次の10年に向けてこうした点が明らかになるよう今後も進めていきたい。

参考文献

- 椎名沙紀 (2008). 写真材料を用いた際に誤った記憶が生起する要因について. 同志社大学文化情報学部 2008 年度卒業論文.
- 宮本沙織 (2010). アニメーション作品の理解に対する状況変化の影響. 同志社大学文化情報学部 2010 年度卒業論文.
- 山橋有希 (2012). パッケージデザインが味覚的印象に与える影響. 同志社大学文化情報学部 2012 年度卒業論文.
- Masuda, T., Ellsworth, P. C., Mesquita, B., Leu, J., Tanida, S., & Van de Veerdonk, E. (2008). Placing the face in context: Cultural differences in the perception of facial emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 94(3), 365-381.
- Zacks, J. M., Speer, N. K., & Reynolds, J. R. (2009). Segmentation in reading and film comprehension. *Journal of Experimental Psychology: General*, 138(2), 307-327.